

社会学部報

◇学部講演会および研究会

- 1993年5月12日(社会学部学術講演会)
講師 甘 惜分 氏
中国人民大学教授・輿論研究所所長
「中国人のものの考え方について」
- 1993年5月12日(研究会特別例会)
講師 甘 惜分 氏
中国人民大学教授・輿論研究所所長
「中国における世論調査研究の現状と課題」
- 1993年6月23日(研究会例会)
講師 正村 俊之 氏
社会学部 助教授
「ウチとソト—日本社会の境界構造—」
- 1993年7月28日(研究会特別例会)
講師 沙 蓮 香 女史
中国人民大学 教授・社会学系研究所所長
東北大学・客員教授
「日本人の集団性と中国人の集団性」

◇人権問題研修会

- 1993年6月30日
講師 藤原一二三 氏
日本キリスト教団 神戸北教会牧師
関西学院大学 非常勤講師
「共に生きる—民族・宗教の相違の中で考える—」

◇海外出張および海外旅行

- 鳥越 皓之 教授
1993年4月29日から6月9日まで
自然・生活環境実態調査のため、モンゴルへ
- 高坂 健次 教授
1993年6月8日から6月15日まで
THIRD EUROPEAN CONFERENCE ON SOCIAL NETWORK ANALYSIS に出席し、報告するため、ドイツへ
- 遠藤 惣一 教授
1993年6月30日より7月4日まで
新設学部の米国滞在教員予定者との面談のため、アメリカへ

- 杉山 貞夫 教授
1993年7月10日より7月21日まで
CELSS国際学会に出席および米国内研究諸機関に調査訪問のため、アメリカへ
- 船本 弘毅 教授
1993年7月13日より7月17日まで
タイヤ族の教会および台湾国際日本語教会での伝道と交流ならびに台湾のキリスト教とキリスト教教育の実情調査のため、台湾へ
- J. A. ジョイス 教授
1993年7月17日より8月16日まで
Family Business のため、アメリカへ
- 高坂 健次 教授
1993年7月22日より8月15日まで
欧州及び米国のワークショップに出席し講演を行い、またISAのミーティングに日本社会学会代表として出席のため、スウェーデンへ
- 中西 良夫 教授
1993年7月25日から8月27日まで
スタンフォード大学で Visiting Scholar として教育社会学及び言語社会学を研究するため、アメリカへ
- 川久保 美智子 助教授
1993年7月30日より9月3日まで
日中社員の意識比較調査および中国人民大学・沙教授と共同研究のため、中国へ
- 宮田 満雄 教授(院長)
1993年8月10日より8月21日まで
米国ディラード大学の招きで(中学部英語研修プログラム五周年記念行事)、また太平洋沿岸、及びニューヨーク同窓会支部訪問のため、アメリカへ
- 對馬 路人 教授
1993年8月19日より9月7日まで
洋上大学セミナーの講師として、シンガポール・ジャカルタ・バース・パラオ・グァム等へ
- 鳥越 皓之 教授
1993年8月24日より9月5日まで
環境保全調査のため、モンゴルへ

- 宮原 浩二郎 助教授
1993年8月24日から9月24日まで
海外英語研修ホームステイプログラムの引率者として、オーストラリアへ
- 眞鍋 一史 教授
1993年8月27日より9月3日まで
国際ファセット・セオリー研究会議企画委員会出席および研究発表のため、チェコへ
- 西山 美瑛子 教授（学部長）
1993年9月2日より9月17日まで
中国人民大学との協定に基づき、交換研究員として、中国へ
- 荒川 義子 教授
1993年9月9日より9月22日まで
英国ヨーク大学での自殺防止のためのセミナー等に出席および関連施設に訪問し研究資料収集のため、イギリスへ
 - 森川 甫 教授
1993年9月16日より9月30日まで
国際共同研究のため、フランスへ

◇会員の新著書

- 倉田 和四生 教授・浅野 仁 教授
（共著）「長寿社会の展望と課題」ミネルヴァ書房 1993.3
- 津金澤 聰廣 教授
（分担執筆）「放社会学研究—特集・多メディア時代の公共性を考える」丸善プラネット(株) 1993.3
- 春名 純人 教授
（著書）「思想の宗教的前提—キリスト教哲学論集—」聖恵授産所出版部 1993.4
- 眞鍋 一史 教授
（共著）「メディアの現在形」新曜社 1993.5
- 高田 眞治 教授
（分担執筆）「自治型地域福祉の展開」法律文化社 1993.3
（著書）社会福祉混成構造論—社会福祉改革の視座と内発的發展—」海声社 1993.7
（社会学部研究叢書第5篇）
- 安藤 文四郎 教授
（分担執筆）「社会理論の新領域」東京大学出版会 1993.4

学 会 消 息

◇数理社会学会

第15回数理社会学会大会が1993年3月22日、23日の両日横浜国立大学において開催された本学から高坂健次教授が出席し、「社会的ジレンマ」の部会の司会をつとめた。

◇異文化間教育学会

異文化間教育学会第14回大会が1993年5月22日(土)、23日(日)の両日、大阪女学院短期大学において開催された。本学からは真鍋一史教授が出席し、「中国人の日本観と国際教育の課題」と題する研究発表を行い、セッションの全体討論に参加した。

◇関西社会学会

第44回関西社会学会が1993年5月29日(土)、30日(日)の両日、椋山女学園大学(星が丘キャンパス)において開催された。本学からは真鍋一史教授が「国際社会」のセッションで「中国における対日イメージの諸相とその変化の方向—サーベイ・データの通時的分析をとおして—」というテーマで研究発表を行った。また第2日目、高坂健次教授は理論Ⅱの部会の司会をつとめた。

◇Third European Conference on Social Network

高坂健次教授はThird European Conference on Social Network (ミュンヘン) 1993年6月10日~13日に出席し、“Process and Network: E-state structuralism and relaxed methods”と題して共同報告を行った。

◇情報通信学会

第10回情報通信学会大会が1993年6月11日(金)、青山学院大学(総合研究所大会議室)において開催された。今回の統一テーマは「21世紀の情報インフラストラクチャーについて考える—そのビジョンと政策—」で、本学からは真鍋一史教授が出席し、討論に参加した。

◇マーケティング教育研究会議第一回シンポジウム

(社)日本マーケティング協会主催の「マーケティング教育研究会議第一回シンポジウム」が1993年6月12日(土)、東海大学校友会館(霞ヶ関ビル33階)で開催された。本学からは商学部の中西正雄教授、社会学部の真鍋一史教授が出席し、中西教授はコーディネーターを担当し、真鍋教授は討論に参加した。

◇日本家族心理学会

日本家族心理学会第10回大会は、1993年6月12日、13日の両日、東京女子大学人間社会学部で開催された。立木茂雄助教授は「家族における愛と親密さ」の公開シンポジウムで、シンポジストとして「凝集性と家族の問題」と題する発表を行った。

◇日中共同シンポジウム

「日中関係の150年—相互依存・競存・敵対—」と題する日中共同シンポジウムが、慶応義塾大学地域研究センター、中国社会科学院近代史研究所、国際文化会館の共催で、1993年6月19日(土)、20日(日)の両日、慶応義塾大学(三田キャンパス)において開催された。本学からは真鍋一史教授が招かれて、「現代日中関係」のセッションで、「日中相互イメージの構造」と題する研究報告を行い、討論に参加した。

◇環境社会学会

7月22日から7月24日まで東京都立大学において環境社会学会と日本社会学会の後援で「アジア社会と環境問題」の国際シンポジウムが行われた。鳥越皓之教授が「アジアの環境問題: 日本との関わり」というテーマセッションで司会を担当した。

◇日本ブリーフサイコセラピー研究会

日本ブリーフサイコセラピー研究会第三回大会は、1993年7月24日、25日の両日、本学において開催された。出席者は250名であった。立木茂雄助教授が大会委員長をつとめ、また「エコロジカルアプローチの理論と実践」について

ワークショップを行なった。

の自立と介助制度」と題して研究発表を行なった。

◇兵庫県・21世紀学会

21世紀学会第2回総会および研究発表会が1993年7月24日（土）、25日（日）の両日、協同学苑（三木市志染町）において開催された。本学からは理学部の渡辺泰堂教授が代表幹事として出席し、社会学部の真鍋一史教授と大学院聴講生の高野奈美子氏は共同研究の成果を「ハイ・モビリティ社会にける住民意識—その諸相と変化の方向—」と題して発表した。

◇The Facet Theory Association

（ファセット・セオリー学会）

第4回ファセット・セオリー学会国際会議が1993年8月29日～9月1日にわたりチェコ共和国プラハの St. Agnes Convent の会議場で開催された。アメリカ合衆国、カナダ、フランス、ドイツ、イギリス、オーストラリア、イスラエル、スウェーデン、オランダ、ギリシャ、日本など世界のさまざまな国の研究者が多数参加し、活気にあふれた発表・討論が展開された。日本からは、統計数理研究所の林知己夫教授と本学の真鍋一史教授が企画委員として参加し、真鍋教授は A. Systematic Approach to Questionnaire Design for Market Research と題する研究発表を行った。なおこの研究発表は関西学院大学国際学会・会議報告者等助成会にもとづくものであることを付記しておきたい。

◇日本社会福祉学会

日本社会福祉学会第41回大会は1993年9月4日、5日の両日、東京・上智大学で開催された。大会テーマは「国際化時代の社会福祉とその課題」で、本学からは武田、高田、荒川、浅野、立木、各先生が参加した。本学からの自由研究報告として、荒川教授は大和非常勤講師と「実習前教育の課題」と題して共同発表をまた、立木助教授は「登校拒否に対するエコロジカル・アプローチ」と題して大学院生平尾桂と、さらに立木助教授は「家族の過程類型の試み」と題して本学卒業生の福永克彦と共同の研究発表を行なった。また、研究員横須賀俊司も「障害者

執筆 者 紹 介 (掲載順)

甘	惜	分	中国人民大学教授 中国人民大学輿論研究所々長	眞	鍋	一	史	関西学院大学教授
劉	琳		関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程前期課程	劉	山	志	明	中国人民大学新聞学院講師
倉	田	和四生	関西学院大学教授	山	路	勝	彦	関西学院大学教授
高	巍		関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程前期課程修了者	牧	野	厚	史	関西学院大学大学院 社会学研究科研究員
佐々木	薫		関西学院大学教授	中	野	秀	一	関西学院大学教授
卜	部	敬	関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程前期課程	赤	坂	真	人	関西学院大学大学院 社会学研究科研究員
盧	秀	植	関西学院大学大学院社会学 研究科博士課程前期課程	芝	野	松	次	関西学院大学教授

社会学部研究会会員

会	長	西	山	美	瑳	子									
運	営	委	員	中	野	秀	一	郎	牧	正	英	春	名	純	人
				鳥	越	皓	之		荒	川	義	正	村	俊	之
会	計	監	査	中	山	慶	一	郎	宮	田	満				
書	記			岡	部	衛	一	郎							
名	譽	会	員	本	出	祐	之		小	関	藤	萬	成		博
				西	尾		朗		岡	村	重	領	家		穰
				嶋	田	津	矢	子	定	平	元	杉	原		方
				清	水	盛	光		田	中	國	栃	原	知	雄
				(A B C 順)											
普	通	会	員	倉	田	和	四	生	杉	山	貞	半	田	一	吉
				武	田		建		遠	藤	惣	佐	々	木	薫
				森	川		甫		張		光	J.A.	ジ	ョ	イ
				船	本	弘	毅		津	金	澤	紺	田	千	登
				村	川		満		眞	鍋	一	山	路	勝	彦
				山	本	剛	郎		高	田	眞	安	藤	文	四
				浅	野		仁		高	坂	健	中	西	良	夫
				石	川		明		對	馬	路	芝	田	正	夫
				芝	野	松	次	郎	宮	原	浩	立	木	茂	雄
				A.	ブ	レ	イ	ディ	川	久	保	荻	野	昌	弘
				三	浦	耕	吉	郎	谷		直				

関西学院大学社会学部研究会会則

第1章 総 則

第1条

本会は関西学院大学社会学部研究会と称する。

第2条

本会は本学部における社会学と関連諸科学の教育・研究の推進を計ることを目的とする。

第3条

本会は事務局を西宮市上ヶ原一番町1—155 関西学院大学社会学部内におく。

第2章 事 業

第4条

本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究会などの開催
2. 機関誌「関西学院大学社会学部紀要」などの刊行
3. 会員相互の研究・教育に関する連絡および協力
4. 本学部の教育・研究に対する協力
5. 国内外関係諸学会との協力
6. その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会 員

第5条

本会の会員は次のとおりとする。

1. 名誉会員 本会に功労のあったもので、本会の推薦するもの
2. 普通会員 本学社会学部専任の教授、助教授、講師および助手
3. 賛助会員 本会の趣旨に賛同するもの

第4章 運営組織

第6条

第2章記載の事業を行うため、本会には以下の委員、委員会等をおく。

1. 会長は当該年度の社会学部長とし、本会には以下の委員、委員会等をおく。
2. 運営委員（6名）：運営委員は普通会員の中から互選し、運営委員会を構成する。
3. 運営委員長（1名）と会計（1名）：運営委員長と会計は運営委員の中から互選する。
4. 運営委員会は第4条に記された事業の企画・運営にあたる。

なお、機関誌「社会学部紀要」の編集については運営委員会内に複数の委員をもって構成される編集委員会を置く。編集委員長は、運営委員長が兼ねることがある。

5. 会計監査（2名）：会計監査は普通会員の中から互選する。
6. 書記は社会学部事務長に委嘱する。

第 7 条

本研究會委員の任期は2年とする。重任を妨げない。

第 5 章 総 会

第 8 条

總會は定期總會と臨時總會とし、會長が主宰する。定期總會は毎年一回開催され、臨時總會は會長が必要と認めたとき、あるいは普通会員の1/2以上の要求があった場合に開催される。議決は出席者の過半数をもって行う。

第 9 条

總會の承認を必要とするものは第6条第1項のほか、次の事項とする。

1. 事業計画および収支予算
2. 事業報告および収支決算
3. その他運営委員会において必要と認めた事項

第 6 章 会 計

第 10 条

本會の會計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第 11 条

本會の経費は次の収入をもってあてる。

1. 会 費
普通會員年額 31,200円
賛助會員年額 10,000円
2. 寄付および補助助成による金品
3. その他の収入

第 12 条

本會員および本學社会学部大学院學生・大学院研究員並びに学部學生は機関誌の配布を受ける。學生の購読費は年間2,600円とする。

付 則

第 1 条

本會の事業運営に必要な諸規定は、運営委員会の議を経て別に定めることができる。

第 2 条

本會の會則変更および本會の解散、ならびに、これに伴う財産の処分等については、總會において、出席者の2/3以上の同意を得ることを要する。

第 3 条

本會則は1992年4月1日より施行する。

「社会学部紀要」編集内規

1992年4月1日施行

1. 「社会学部紀要」(以下、本紀要という)は原則として、当該年度中に2回発行する。6月末を締切日とする号は10月上旬の配布を11月末日を締切日とする号は3月25日の配布を目標とする。
2. 本紀要の企画、編集、発行は社会学部研究会「社会学部紀要」編集委員会がおこなう。
3. 本紀要に掲載される原稿の種類は以下に掲げるものとする。
 - ①原著
 - ②研究ノート
 - ③学部および社会学部研究会主催、共催の講演会の講演原稿
 - ④書評、内外の学術研究、学術集会の動向の紹介
 - ⑤社会学部最優秀卒業論文賞(安田賞)受賞論文
 - ⑥その他編集委員会が必要と認めた記事
4. 本紀要への投稿有資格者は社会学部研究会名誉会員、ならびに普通会員とする。なお、共同執筆者は名誉会員あるいは普通会員の推薦を受けた者、名誉会員あるいは普通会員と共同研究をおこなった者とする。

大学院学生ならびに研究員単独の論文原稿の掲載に関しては、普通会員による推薦と編集委員会の審査を経て決定する。
5. 原稿の執筆に際しては、以下の様式に従うものとする。
 - ①原著については、原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙100枚以内、研究ノートについては原則として図表、写真を含めて200字詰め原稿用紙60枚以内とする。ワードプロセッサによる原稿については字数においてそれらに相当する分量とする。
 - ②手書き原稿に用いる原稿用紙は研究会指定の200字詰め横書き原稿用紙とする。
 - ③図表、写真等は題字、説明つきですべて本文とは別紙とし、本文中に挿入する個所を本文欄外に指示すること。

図凸版(トレース、写植代)は10,000円を限度として社会学部研究会が負担するが、それを超える分は執筆者の負担とする。
 - ④原稿には和文および英文の表題をつける。また執筆者名、所属機関名についても同様とする。
6. 本紀要に発表する原著論文、研究ノートは他に未発表のもの、または学会大会等での口頭発表の主題をその学会等の了解のもとに原稿にまとめたものに限られる。
7. 外国語による原稿については編集委員会において審議の上、許可することがある。分量は日本語原稿の場合に準ずるものとする。
8. 編集委員会が依頼した外国語原稿を翻訳して掲載する場合には、その翻訳者に対し翻訳料を支払うものとする。その金額については社会学部研究会運営委員会で審議の上決定する。
9. 本紀要に掲載された論文等は無断で他の雑誌等に転載することを禁ずる。

また、執筆者がすでに外国語または日本語で発表した論文等を日本語または外国語に翻訳して掲載を希望する場合には、編集委員会において審議のうえ、それを許可することがある。ただし、この場合、著作権処理に関する責任は全て執筆者が負うものとする。その場合の翻訳料は支払わない。
10. 本紀要の執筆者に対しては本誌1部と抜刷30部を無料で配布する。ただし、それ以上の抜刷を希望する場合、その実費は本人の負担とする。
11. 発行された紀要は名誉会員、普通会員、大学院学生、大学院研究員および学生に配布する。また、本紀要は上記以外の者に頒布することができる。なお、頒布料は原則として学生の購読料と同額とする。
12. この編集内規は研究会運営委員会の議を経て変更することがある。ただし、その変更はその年度の社会学部研究会総会で報告されなければならない。

＜編集後記＞

丁度1年前には、蟬の声を聞きながら猛暑のなかで編集後記を書いたことを覚えているが、今年は第5別館の取り壊し工事の騒音のなかでこの一文を書いている。一時は社会学部の準専用棟でもあり、その利用の仕方について委員会まで出来た建物であることを思うと、その一部が取り壊されるにしろ、感慨無量という気分になってしまう。

さて、今年の夏ということになれば、なんといっても政局の大転換をあげなければなるまい。38年間の長きにわたって日本を支配してきた自民党が野に下ったのである。それに変わって、やや「奇妙な」連立政権が誕生した。気候の方も「冷夏」とやらで、少々いつもとは様子が違っていた。

しかし、社会学部紀要の方は、こうした内外の大転換をよそに、着実にして、かつ不動である。本年度は、この後69、70号とジョイス、半田両先生の定年退職記念号が刊行される予定なので、本号への寄稿が一寸少くな目であったように思われるが、それでも専任教員から論文4編、ふたりの役員からも力作を頂戴することができた。

巻頭には、中国人民大学の甘惜分先生が5月に社会学部で行われた講演を、テープから起こして、日本語に翻訳し掲載した。いささか訳文に手をいれたが、読みづらい点のご勘弁願いたい。

それから、本号には、前年度に引き続き、1992年度の最優秀（卒業）論文賞を獲得した橋本裕理・森本美千子共著「子どもの虐待ホットラインにおける目撃者に対するアセスメント指標の作成」を掲載した。なお、今回からは、出来る限り論文全体を収録することにした点と併せて、選考委員会の論評と指導教授の推薦の言葉を付けることにした。学生諸君がこれらを参考にして、各自全力投球で社会学部時代の研鑽の成果を卒業論文としてまとめるよう努力することを期待したい。それにしても、4回生が5月頃から就職活動でゼミを欠席し始めるという〈過酷な〉現実はどう対処したらよいのであろうか。ゼミ担当者としては頭の痛い問題ではある。

例によって、編集作業では事務室の染谷廸子さんに大変お世話になった。記して感謝の意を表しておきたい。（中野）

1993年10月1日 印刷

1993年10月10日 発行

編集発行人 西山美瑛子

発行所 関西学院大学社会学部研究会

〒662 西宮市上ヶ原一番町

関西学院大学社会学部内

電話(0798)(53)6111(代表)

(内線)4212

印刷所 尼崎印刷株式会社

〒660 尼崎市北大物町16-55

電話 (06)481-0707(代)

KWANSEI GAKUIN

SOCIOLOGY DEPARTMENT STUDIES

(SHAKAIGAKUBU-KIYO, KWANSEI GAKUIN DAIGAKU)

No. 68

October 1993

The Study Association of Sociology Department

KWANSEI GAKUIN UNIVERSITY

Nishinomiya, Japan
